

これからのIPPS-J ～新会長からのお願い～

宮崎大学 農学部・IPPS-J 会長 鉄村 琢哉



皆様良い年をお迎えのことと存じ上げます。
このたび新会長を仰せつかりました鉄村です。
よろしくお願い申し上げます。

地方大学の一教員で、学生と共に果樹の研究を進めながら日々を過ごしている私は、IPPS-Jに入会してからしばらくの間、ブラックブックを入手したいだけの幽霊会員でした。2007年に私の住む宮崎で開催された第14回大会の実行委員の一人として理事代理となり、それ以来、理事会に関わるようになりました。理事会に出席するたびに「会を何とか活性化しないと、、、」という話題が上り、議論を重ね、いろんな行動（アンケート調査やニュースレターの充実等）をしてきましたが、残念ながらその行動により大いに活性化したとはいえる状況ではありません。活性化しないとIPPS-

Jがどうなるかはホームページに掲載の最新の理事会議事録を見ていただければわかります。

12年前の半数に減った現会員の会費のみでは、IPPS-Jを維持することはできません。議事録には会員数が200名になると収支が釣り合うと書かれています。また、現在の会員数もホームページに掲載されています。

そのような状況の中、昨年の愛知大会は近年の大会では最も多数の参加者を迎え、無事に終えることができました。実行委員長の水谷理事を中心に手際よく運営されていることに感心し、様々なイベントのどれもが印象に残っています。懇親会でタクト(株)の西川さんが「こんなすばらしい会が無くなるのはもったいない。皆さんも入会して下さい。」と発言された時は、思わずその通りだと相槌を打たせて頂



(IHC2014 (国際園芸学会議) 実行委員長Drew教授と研究室の学生らと一緒に撮影)

きました。一方、タイから参加していた斉藤さんが「IPPS-Jが私の命よりも続くことを祈っています。」と乾杯のご発声をされたときは、ちょっと胸がつかえてしまいました。

宮崎県では、知事が「県民総力戦」を掲げ、口蹄疫等、多くの問題に対処してきました。IPPS-Jも会員一人一人が、この会を存続させるためには何をすべきかを考える時期に来ていると思います。私は会員を増やして頂くのが最も良いアイデアだと考えていますが、他にも会を活性化するために良いアイデアがあれば是非、教えてください。「入会するとどんなメリットがあるのか？」と尋ねられることがありますが、「大会に参加するとわかります。」と伝えるのが一番良いのではないかと愛知大会に参加して感じました。皆さんはどのようなことがIPPS-J入会のメリットだと思われるのでしょうか？もちろん、このニュースレ

ターも毎回、楽しく読ませてもらっています。

来年はいよいよ国際理事会が日本で開催されます。石井理事を中心にその準備を進めているところです。また今年の愛媛大会は大橋副会長を中心に準備が進められています。こんな大変な時に、国内では一番南に在住している会員の私が会長になるのは足を引っ張っていると思われてしまいそうですが、インターネット時代のこの世の中、文字や写真、そして動画による情報の交換においては地球上の何処に住んでいてもデメリットはありませんので引き受けさせて頂きました。そして、そういう時代だからこそ、face to face が非常に重要になってくるのではないのでしょうか。

それでは、いろいろな人に声をかけてから10月に道後温泉でお会いしましょう。皆様と共にIPPS-Jのさらなる発展を願っております。

IPPS世界大会の開催

今年のIPPSの世界大会は下記の要領で開催されます。どなたか是非ともお出かけ下さい。

【期日】2011年5月26日(木)～29日(日)

【会費】詳細はインターネットをご覧ください。

【場所】オーストラリア シドニー

【HPアドレス】<http://www.ipps.org.au/confer.html>

‘Outback and Beyond’

INTERNATIONAL PLANT PROPAGATORS’ SOCIETY
AUSTRALIAN PRE CONFERENCE TOUR - MAY 2011

Get in fast, spaces/seats are limited so register early.
We don't want you to miss out!

IPPS
Sharing Plant Production Knowledge Globally

LONG Tour: Melbourne to Sydney \$3,500 AUD per person twin share (12 nights) 14th – 26th May 2011

SHORT Tour: Canberra to Sydney \$2,200 AUD per person twin share (6 nights) 20st – 26th May 2011

What's included: Accommodation – LONG Tour: 12 nights. SHORT Tour: 6 nights. Travel on luxury coach. All meals, breakfast, lunch and dinner some with drinks. Internet connection whilst on tour. Complimentary full registration for Australian Region IPPS Conference.

What's Not Included: Alcoholic drinks. Hotel accommodation after tour (26th May). Airport transfers.

海外で学んだ大きな力

有限会社スコレー 大内 盛勢



大学卒業後海外へ。アメリカのロサンゼルス近郊の San Gabriel Nursery で農業研修をしました。幼少より海外での生活にあこがれていた私はいつか海外に行きたい、行って生活してみたいという思いがありました。大学では国際農業開発学科で国際協力や世界の食糧問題等さまざまなことを学びました。

渡米後は園芸店にて日系人が経営するとても大きな会社で研修することになりました。従業員も多くお店と農場をいくつか持っていて社長は日系2世でした。この会社にはアメリカ人はもちろん、日本人、メキシコ人、中国人、台湾人などいろいろな人種の人たちが集まって仕事をしていました。私が渡米したころは英語もうまく話せ

ない状態でしかも違う国の人たちでした。基本的に共通語は英語です。

しかし、メキシコ人の中にはスペイン語しか話せない人もいてコミュニケーションがいろいろと大変でした。しかし、身振り手振りでなんとか意思の疎通をして、仕事をしていました。マネージャーからはかなり細かい支持を英語でされるのでいつもコンパクト辞書を身につけて小さなノートを持ちわからないことはすぐそのノートへメモするようにしていました。次第にみんなと打ち解けていき、帰国前には大勢の仲間ができました。



研修先の店先（ローズの苗）



バラ畑

※この派遣事業については（社）国際農業者交流協会へお問い合わせください。

TEL:03-5703-0251 〒144-0052 東京都大田区蒲田5-39-2 明治安田生命蒲田駅前ビル6F

仕事の合間に幼少より剣道をしていたので近くの剣道道場へ通いました。車を持ってない私はいろいろな人にお世話になり、送り迎えをしてもらったりバスで行ったりしていました。最後には試合にも出させていただきその大会で優勝することができました。どんな大会であっても優勝すると嬉しいですね。

Nurseryでの研修も私生活でもいろいろな人に支えられて頑張れたと思います。その中で非常に多くのことを学ぶことができました。知識や技術だけでなく多くの仲間やお世話になった人、私にとって経験すべてが大きな力になったと思います。

今回、ニュージーランドへ支部間交流で行くことができアメリカで学んだ経験を活かすことができ、また多くの人と出会い、言葉ではすべて言い表すことができないくらいたくさんのかことを学びました。日本ではできない経験をし、大きな成長ができたと思います。愛知大会では体験発表の場を頂き、現地での活動を伝えることができました。

これからはその経験を活かしてさらなる成長をしてきたいと思います。

I P P S - Jの支部間交流でニュージーランドへ行かせていただき感謝しています。

アメリカの剣道の大会で優勝
(大変お世話になった方と一緒に)



研修先のスタッフの皆さん



蘭展でショーを受賞しているブース (右は社長)



私が日本で研修した
岡田さんの蘭をアメリカで発見

花成の不思議： 植物ホルモンによる制御



(有)バル企画 代表取締役 ^{かむろ} 禿 泰雄

花成が誘導されるキッカケの要因の1つが、日長変化であることは一般常識です。日長変化と花成ホルモン？なる仮称物質についての談議が久しく為されていますが、その実体は未だに尾ッポさえ捕まえていないと言えましょう。花成ホルモンなる仮称物質は存在するのでしょうか？花成の始まる生理変化のキッカケは何でしょうか？

私は、既知の植物ホルモン類のバランス制御による開花コントロールに挑んでいます。既に、その成果の一部は花卉生産農家に普及しつつあります。本稿ではその成果の実情と、ここに至る過程で得られた知見と今後の見通しを紹介して、御助言や御批判を戴ければ幸甚です。

1 長日性と短日性の花成誘導における 限界日長説の疑問

限界日長説では、「長日性植物の花成は限界日長より長い日長条件で誘導され、短日性植物の花成は限界日長より短い日長条件で誘導される」と言われています。この学説は、どうも腑に落ちません。人為的に日長と温度をコントロールした実験条件では、この説は或る程度当てはまる成長を示します。

しかし、自然環境条件下では、長日性に分類される植物（ホウレンソウ、ナタネ、ダイコンなど）は、最も日長の短い冬季の低温期に花成して、早春の気温上昇に伴って、春分前から開花が始まります。日長の長い高温の夏季に花成するものは見当たりません。高温の夏季は種子で過ごすものが殆どです。長日性植物ならば、日長の長い夏季に成長して花成する植物が多くてもよいのに。

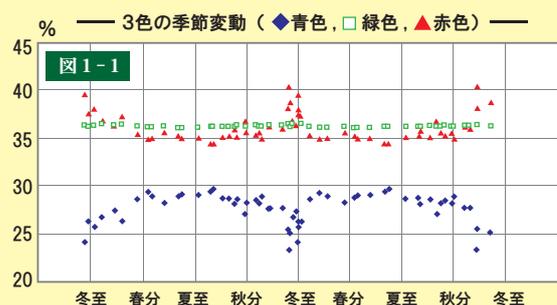
一方、短日性に分類される植物（アサガオ、キク、イネなど）は、最も日長の長い真夏の高温期に花成が起こります。日長の短い低温の冬季に花成するものは見当たりませ

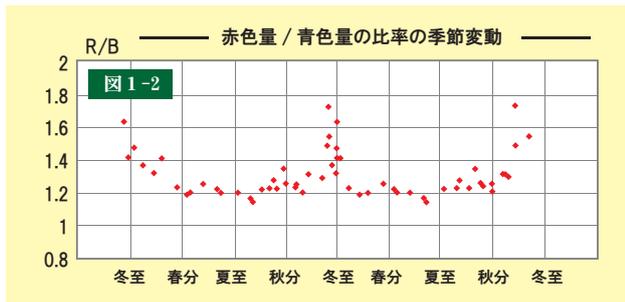
ん。低温の冬季は種子で過ごすものが殆どです。短日性植物ならば、日長の短い冬季に成長して花成する植物が多くてもよいのに。どうしてでしょうか？

2 季節的日長変化にともなう 太陽光質の劇的な変動

上記の疑問は、次の事実により私は自己納得しています。【図1】は、2年間に亘って、東京で測定した結果です。太陽光線の光合成有効放射を構成する赤色光、緑色光、青色光の構成比率の季節変動です。変動様相は、波状の増減パターンではなく、その変動パターンは極めて特徴的です。赤色光は冬至に最大ピークを示し、夏至に最低を示し

【図1】 光合成有効放射の3色(青色, 緑色, 赤色)の比率の季節変動





ます。一方、青色光は、夏至に最大ピークを示し、冬至には最低となります。緑色光は通年一定です（文献1, 2）。このことが花成に重要な影響を及ぼしていると思います。

この変動パターンは、赤道に近づくと殆どなくなり、高緯度になるほど極端になり、地理的影響が大きく現れます。即ち、太陽が天空高く昇る季節や地理的条件では、青色光比率が高まるのです。太陽の軌道が低くなる季節や地理的条件では、赤色光比率が高まるのです。

3 長日性植物は赤色光により、短日性植物は青色光により、日長に関わり無く花成が誘導される

長日性と短日性と言われる幼植物類に赤色光、緑色光、青色光を照射して、花成の早遅を比較すると、長日性植物は、赤色光照射で生育や花成が促がされ、青色光照射では抑えられました。一方、短日性植物類は、青色光照射で生育や花成が促がされ、赤色光では抑制されました（【写真1】、文献1, 2）。この結果と次の生態は符合します。日本の自然環境条件下で見られるように、長日性植物類は、赤色光比率の高い冬季に花成して、蕾を抱えたロゼット状態で冬の寒さに耐え、早春の気温上昇にともなって一気に茎立ちして、開花結実するのです。そして、長日性植物類は青色光を好まないため、夏季は種子で過ごすのでしょうか。逆に、青色光を好む短日性植物類は、青色比率の高まる夏期に向けて充分栄養成長して花成し、

【写真1】長日性と短日性の植物の光質による花成の違い



秋に実を結び、赤色光比率が高まり、低温の冬季は種子で越冬する生態を示すことと矛盾しません。高緯度地帯の植物類は、冬至と夏至を境にして劇的に変動する太陽光質に順応して、花成：開花：結実して、次世代への生命の継承の生態を示すのでしょう。

緯度が低く（赤道に近く）なる程、青色光比率は高くなるので、青色光を好む短日性植物は花成し易くなります。例えば、アサガオやサツマイモは、栄養成長は不十分でも、台湾以南では、着花し易くなります。そして、通年、生育に適した気温と降雨量の下では、光質の変動パターンは小さくなるため、季節変動の感受が難しく、低緯度地方の植物類の栄養成長と花成の生態は、斉一性を欠くことになるのでしょう。その代わりに、乾季と雨季の気象変動が、高緯度地方よりも影響を及ぼしやすくなるのではないのでしょうか？

4 花成は、GAとABAの濃度バランス制御によっても、日長に関わり合い無く花成が誘導できる。

上記の知見に加えて、大変興味ある知見は、長日性植物類は、GA+SABA（ジベレリン+天然アブシジン酸）の混合散布により、日長に関わらず、花成誘導されることが判明しました。効果的な両剤の組合せ散布濃度巾は限定的で（【表1】、【写真2】、文献3）、どち

【表1】 SABA+GA混合散布によるホウレンソウ花成効果

| 散布濃度 (ppm) | | 花成株率% | 茎長 cm |
|------------|----|-------|-------|
| SABA | GA | | |
| 50 | 50 | 0 | 8.1 |
| 50 | 10 | 0 | 3.1 |
| 50 | 2 | 0 | 0 |
| 50 | 0 | 0 | 0 |
| 10 | 50 | 0 | 8.8 |
| 10 | 10 | 100 | 4.1 |
| 10 | 2 | 40 | 1.1 |
| 10 | 0 | 0 | 0 |
| 2 | 50 | 0 | 6.5 |
| 2 | 10 | 100 | 4.4 |
| 2 | 2 | 100 | 2.0 |
| 2 | 0 | 0 | 0 |
| 0 | 50 | 0 | 6.0 |
| 0 | 10 | 0 | 3.8 |
| 0 | 2 | 0 | 0 |
| 0 | 0 | 0 | 0 |

【写真2】

長日性花卉類の
SABA+GA混合散布
による花成促進



らかの剤の濃度バランスが高すぎても低すぎても花成効果は見られません。勿論、どちらかの剤の単独処理でも、効果はありません。また、効果的な組合せ濃度は、植物の種類により異なります。この知見に基づいて、長日性花卉類での、GA+SABA混合散布による開花促進技術が、花卉生産農家で実用普及しつつあります（【写真2】）。

一方、短日性植物類では、植物体内のジベレリンとアブシジン酸の内生レベルを同時に低下させる処理を行なうと日長に関わらず花成誘導できる可能性が得られました（【写真4】、詳細未発表）。現在、経済性の

【写真3】

短日性花卉のSABAとGAの
植物体内レベル低下作用を
示す物質の混合散布効果

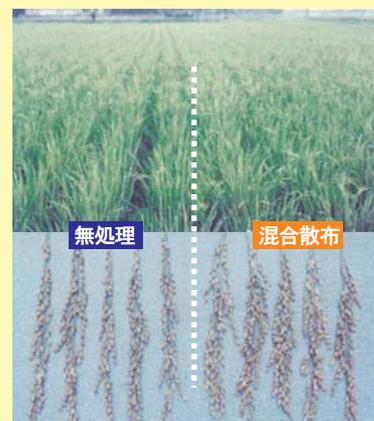


ある剤の選定と、実用的な組合せ濃度を検討中です。

短日性植物類では、GA+SABA混合散布での花成を早める効果は認められませんが、花芽形成中の時期に混合散布すると、花芽分化数の増大がみられます。【写真4】

【写真4】

SABA+GA混合散布による
短日性水稻の穎果数増加効果

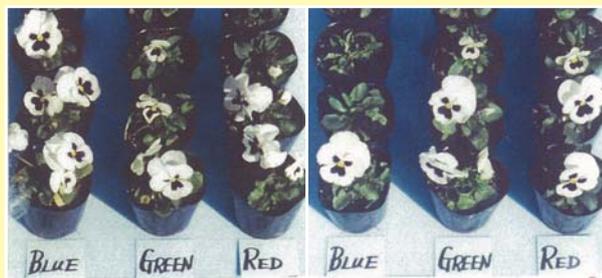


のように、水稻では、幼穂形成期にGA+SABAの2-10ppmの低濃度混合液を散布すると、花数（穎果数）が20%程度増大して、大きな増収効果がみられます（文献4）。東南アジアでは米増産目的で既に実用されています。日本では、水稻でのGA実用登録が無いため、残念ながら普及が見送られています。

5 GAとSABAレベルが 花成コントロールに及ぼす光質の影響

ジベレリンとアブシジン酸レベルが花成に影響しているとすれば、光質も、これらの植物ホルモンの作用発現に影響を及ぼしていると推定されます。この点について検討したところ、長日性花卉の青色光による花成の抑制作用は、GA+SABA混合散布により解除されました（【写真5】、文献5）。青色光

【写真5】長日性花卉の青色光による花成抑制のSABA+GA散布による抑制解除



照射前にSABA+GA混合散布 単色光照射のみ
単色光を11月5日から毎日10時間8日間照射。
長日性パンジーの花成は、短波長光(青色)で遅れ、長波長光で早い。
SABA+GA散布で、青色光の抑制は解除され、長波長の影響は小さい。

は、長日性植物の内生ジベレリンとアブシジン酸のレベル、または、作用発現力を低下させるのでしょうか？また、短日性植物の花成にとって、青色光が効果的であることと、ジベレリンとアブシジン酸のレベルを低下させる剤の散布も花成に効果が有ることとは、興味ある作用性です。GAやABAの内生レベルや作用発現力に及ぼす光質の影響についての検証が待たれます。

6 日長反応性の低い植物の植物ホルモン類による花成コントロールは・・・

低緯度地帯の果樹類は、日長変動が小さいため、斉一な花成開花が得られ難いのです。このことは、果実収穫の農作業性に影響します。このため、経験的に、アンチジベレリン剤やエチレン剤などによる花成の促進と斉一化の方法が為されています。しかし、その効

果は限定的であり、樹体や果実品質への影響も無視できません。SABAの混合利用により、従来剤の使用濃度の低下と効果の向上、樹体への悪い影響(葉害)の低下が認められ、新しい花成コントロール技術の普及が始まっています（【写真6】）。このように、日長反応性の低い植物類は、内生植物ホルモンレベルの微妙な変動により、栄養成長と生殖成長の変動が生ずるのでしょうか。

【写真6】SABA+エスレルの混合散布による熱帯果樹類の開花誘導効果



あとがき

光質の異なるランプや、光質選択性被覆材の実用化研究も進みつつありますが、その実用は、施設栽培に限られ、広大な圃場での利用は困難でしょう。私は、以上のような知見を踏まえて、既知の植物ホルモン類の作用制御による開花コントロールの技術開発を目指しています。

引用文献

- 1) 禿泰雄, 遠山隆文, 岡部勝美 (2002) 新機能光選択性被覆資材が野菜花卉の生育品質に及ぼす影響. 農耕と園芸. 9月号. 76-79.
- 2) 禿泰雄, 遠山隆文, 岡部勝美 (2003) 新機能の光選択性被覆資材. 植物の生長調節誌. Vol.38, No.1, 72-81.
- 3) Y.Kamuro, S.Onwana-Agyman and S.Matsui (2001) The promotive effects of applying mixtures of (S)-(+)-abscisic acid gibberellin on flowering in long-day plants. Plant Growth Regulation 33:189D194.
- 4) 禿泰雄, 鄭新淑, 松井鑄一郎 (1996). 天然型アブシジン酸とジベレリンの組合せ処理による生育と開花の促進効果 (第2報): 水稲と小麦について. 植物化学調節学会発表要旨. 75-76.
- 5) 禿泰雄, 石井征亜, 山崎敬亮 (1999) 光質制御による短日植物と長日植物の生育および花芽形成への影響. 第4報 光質が植物ホルモン処理効果に及ぼす影響. 日本生物環境調節学会 1999年大会発表要旨. 352-353.

マンゴーの品種紹介

近畿大学附属農場 文室 政彦



平成18年4月より、28年間勤めた滋賀県職員を退職し、近畿大学附属農場に勤務しています。当農場では、有田ミカンの産地にあることから、温州ミカンを約3.5 ha 栽培していますが、マンゴー栽培でも名をはせており、大型ハウス3棟（約30 a）で栽培したマンゴーを「近大マンゴー」のブランド名で販売しています。



マンゴーハウス全景

最近、消費者のマンゴー人気の高まりから、マンゴーの栽培を始める農家が全国的に増えています。当農場では、マンゴーの栽培試験とともに、繁殖や育種の研究も行っていますので、当農場で育成した品種を含めて、有望品種を紹介したいと思います。



収穫期の‘アーウィン’

① アーウィン



アメリカフロリダで育成された早生品種で、国産マンゴーの9割以上がこの品種です。果皮色が鮮紅色、果肉は黄色で、繊維が少なく、香りがあり、美味しい品種です。当農場では、8月中下旬に収穫する遅い作型のため、糖度は16～17度と大変甘くなります。JA宮崎経済連では、糖度15度以上、完全着色で、350g以上の果実を「太陽のタマゴ」というブランドで販売していますが、認証されるのは全体の15%だけということです。成熟期の日照量の関係から、収穫期を早めるとどうしても糖度は高くなりません。

② 愛紅



当農場で、金煌（きんこう）という台湾の品種にアーウインの花粉を自然交配させて育成し、2008年に、国産マンゴ第一号として、品種登録をしました。愛紅は、アーウインより1～3週間収穫期が遅い中生品種で、果皮色は暗赤色、果肉は黄色、繊維はほとんどなく、多汁で柔らかいという特性があります。反面、果肉が軟化しやすいという欠点があります。しかし、学生に食べさせるとアーウインよりもおいしいといえます。現在、日持ちのよい追熟・貯蔵方法を研究し、早く消費者に果実を届けたいと思っています。

③ スピリット



正確には、スピリット・オブ・76という名前の中生品種で、平均糖度が20度と高く、当たり外れがありません。着果数を制限すると大玉になり、糖度も22度位まで上がります。果肉は濃い黄色で、繊維はアーウインと同程度で、味は濃厚、大変美味しい品種です。果実の形はアーウインと似ており、果肉もしっかりして、輸送性や日持ち性も大丈夫です。ただし、果皮色は暗赤色で、果実の表面に果点と呼ばれる白い斑点があり、粗く分布しています。外観はアーウインよりも劣りますが、甘みが強いことが特長です。

④ エドワード



果皮色は全体としては黄色ですが、日の当たる部分は薄いピンク色になります。果肉は濃い黄色で、繊維はたいへん少なく、味は濃厚です。この品種も糖度が高いのでおいしく食べられます。皆さんも食べられたことがあると思います。フィリピンの黄色いペリカンマンゴ（正式名はカラバオ）に味が似ています。その理由はカラバオとハイデン（アーウインの先祖）を両親に持つからです。中生品種ですが、果実は大きくなり、毎年よく結実します。果実の輸送性や日持ち

性も良く、果肉が軟化したりする生理障害が少なく、安定して生産ができる品種だと思われます。案外、作ればりピータのつく品種ではないかと思われます。

オーストラリアの園芸を視察して



(株)赤塚植物園 藤森 忠雄

昨年12月中旬、オーストラリアの植物を輸入すべく、メルボルンへ出掛きました。
今回はその一部を報告いたします。

オーストラリアへの旅行の日程を考える際に、オーストラリア通の大森会員に相談したところ、早速、助言をいただき、ある人物を紹介いただきました。

紹介いただいた Mr. Robert Chin (Nursery & Garden Industry Victoria) は I P P S の会員でもあり、この業界のことは熟知している方です。従って、私の要望を聞き、見学の日程を作成してくれました。また一日は見学に同行してくれました。彼は開口一番、2011年5月27日(金)–29日(日)にシドニーで I P P S の世界大会を開催するので、日本からも沢山参加して欲しいので、その旨、みなさんに伝えてくださいとのことでした。オーストラリアでは I P P S の会員が約300名だそうです。ここ数年は増加傾向だそうで、大変に羨ましく思いました。園芸業界の社会的地位が日本に比べて高いように感じました。そのことが会員の増加と関係ないでしょうか。

Mr. Clive Larkman (Past President of IPPS-Australia region 2005-2007) の農場を訪問いたしました。多種類の園芸植物を生産して、卸販売している会社です。実生、挿し木、組織培養と植物の特性を生かした増殖をしていました。また、驚いたことは母樹園(約1.5 ha)に1000品種以上の園芸植物を作付けして、生育特性の調査や交配をして新しい品種の作出をしながら、そこがお客様に対しては見本園としての役割も果たしていることでし

た。日本の生産者ではこのような母樹園や見本園を持つ人は極限られていて、ほとんどありません。

Mr. Daniel Mansfield (I P P S- 会員) の農場に到着して、駐車場で車から降りると、事務所から若い彼がニコニコしながらこちらに近づくまで来たのにはびっくりいたしました。Mr. Chin からの連絡が功を奏していたことと思います。この農場は園芸植物の生産者に対して苗を供給することを主な仕事にしている会社です。見本園は建設中でしたが母樹園は広大(約5 ha)な面積を持っていました。ここでも増殖は実生、挿し木、組織培養と使い分けて、なかなか高品質のプラグ苗を大量生産していました。

農場見学を通じて感じたことは

- 1) 働いている人達が若いことでした。また表情が大変に明るいことが印象的でした。
- 2) 見本園、母樹園をどこの農場でも大小は別にして持っていること。
- 3) 苗の生産者と商品の生産者の区別があることでした。勿論、苗生産から商品生産まで一貫して行なっている生産者もいましたが。
- 4) 作業を上手に機械化している生産者がいました。日本のお茶の刈り込み機を苗のピンチ用に改造していました。ピンチして、その穂を挿し木に使うというものです。
- 5) 日本のような立派なガラス温室は見ませんでした。台風がないためでしょう。



以上、今回のオーストラリア見学の一部を報告させていただきました。

今回のオーストラリア行きに際して会員の大森直樹様（株山陽農園）に大変にお世話になりました、紙面を借りてお礼を申し上げます。

Mr. Clive Larkman（左から2人目）

Mr. Robert Chin（左から3人目）

IPPS-J 第八期理事・監事・役員・理事代理名簿（2011.1.1～2012.12.31）

| | 役職 | 氏名 | 担当 | 会社・所属 |
|----|----------|--------|-----------|------------------------------|
| 1 | 会長 | 鉄村 琢哉 | | 宮崎大学 農学部 教授 |
| 2 | 副会長 | 鈴木 隆博 | HP静岡大会 | (株)浜松花き 代表取締役 |
| 3 | 副会長 | 大橋 広明 | 愛媛大会 | 愛媛大学農学部 生物資源学科 助教 |
| 4 | 事務・会計理事 | 南出 幹生 | | 南出(株) 代表取締役 |
| 5 | 編集理事 | 富田 正徳 | | (株)アイエイアイ エコファーム部 |
| 6 | 国際理事 | 仁藤 伸昌 | BlackBook | 近畿大学 生物理工学部 教授 |
| 7 | 国際理事代理 | 内田 恵介 | | グリーンクラフト 代表 |
| 8 | 理事 | 石井 克明 | 国際理事会 | 森林総合研究所 森林バイオ研究センター センター長 |
| 9 | 理事 | 佐藤 伸吾 | IPPS活性化 | (株)花街道 代表取締役 |
| 10 | 理事 | 藤森 忠雄 | ニューズレター | (株)赤塚植物園 執行役員常務 兼 社長室 室長 |
| 11 | 理事 | 水谷 朱美 | 国際理事会 | (株)ベルディ 代表取締役 |
| 12 | 監事 | 遠藤 弘志 | | 揖斐川工業(株) アグリバイオ部 取締役アグリバイオ部長 |
| 13 | 国際交流推進委員 | 大森 直樹 | IPPS活性化 | (株)山陽農園 代表取締役 |
| 14 | 年史編纂委員 | 柴田 勝 | | (株)王健 代表取締役 |
| 15 | 理事代理 | 青山 兼人 | 国際理事会 | 兼弥産業(株) 事業本部 取締役部長 |
| 16 | 理事代理 | 速水 正弘 | 静岡大会 | 静岡県立農林大学校 |
| 17 | 理事代理 | 小池 安比古 | | |
| 18 | 理事代理 | | | |

編集後記

明けましておめでとうございます。

新しい年が会員の皆様にとって、輝かしい年になりますようにお祈りいたします。

ニューズレターの編集をこれからもさせていただくことになりました。

最近世界の他の地域のニューズレターを見る機会が増えました。それらに影響を受け、日本のニューズレターを更に良いものにしなればと思うようになりました。

42号は原稿の締め切りをしてからオーストラリアへ出掛けましたので、編集作業が大変に遅れました。10月の大会で皆さんに原稿依頼をいたしましたので、早くいただきましたが、会員の皆様にお届けが遅れましたことお詫びいたします。

今回、オーストラリアの園芸の生産現場を見学して、感じたことは生産をしている方は是非とも、海外の進んだ生産現場を沢山見てほしいということです。そうでないと取り残されてしまいます。その意味でもこの会は大変に利用価値があります。

今年のIPPSの世界大会はオーストラリアで開催されます。

どなたか是非ともお出かけ下さい。

ニューズレター担当：藤森忠雄

ニューズレターへの原稿大募集

会員相互の情報交換の場として、このニューズレターをご利用ください。気軽に投稿していただければ幸いです。ご投稿を心からお待ちしております。

手書き文章はもちろん、CD、Eメールでも受け付けます。写真も大歓迎です。原稿内容は1ページあたり1,000字+写真2～3枚。顔写真をお忘れなく。

受付窓口

〒514-2293
三重県津市高野尾町1868-3
(株)赤塚植物園 藤森 宛
TEL 059-230-1234(代)
FAX 059-230-0576
E-mail ffctf@akatsuka.gr.jp